

新潟県北部に於ける昔話の伝承

大嶋善孝

昭和五二年から五三年にかけて新潟県岩船郡朝日村南部を中心として昔話の調査をする機会を得たので、これを報告するとともに、この地域における伝承の実態について若干の考察を加えてみたい。この地域は、昭和三九～四〇年の国学院大学民俗文学研究会による報告と昭和五一年の佐久間惇一氏による報告がまとまつたものであり、そのほか、水沢謙一氏にいくつかの報告があるのみである。したがつて、新潟県では比較的調査の手薄な地域といえる。

調査の対象とした地域は、岩船郡朝日村の南部（旧猿沢村、館越村、三面村）と村上市の東部（旧山辺里村）である。この地域は、村上市で日本海に注ぐ、鮭漁で名高い三面川沿いに展開している。出羽街道が西南から東北へと貫通しているが、交通路の中心は村上市であり主要な道路はいづれも村上市から放射状に展開している。したがつて、この地域の人々は、多少とも大きな買物は村上市に出かけ、年末の節供買いも村上市に出かける。行商人も村上市方面から来る者が多いという。

かつては、多くの宗教者・芸能者がやって来たが、代表的なものについて触れたい。ゴゼは、普通ゴゼサと呼ばれ、その来訪は大変楽しみにされていた。現在でもゴゼの語った語り物の文句を記憶し

ている話者がいることにもその影響力の大さががうかがわれる。しかし、ゴゼから昔話を聞いたという例は、かなり注意を払つて調査したことにもかかわらず聞かれなかつた。春になると大神樂がやつて來た。これは「岩見重太郎」などの芝居もした。これは人数が減つてゐるが現在もやつて来る。ポン様に関する伝承はあまり明確でないが、これは特別に偉い人であり部落の者が次の部落まで送つて行つたという。ただ、これを記憶しているのは明治生れの話者だけであり、比較的早い時期にやつて来なくなつたと考えられる。そのほか、祭文語り、軍談語り、大黒舞い、淡島様など、さまざま芸能者・宗教者がやって来たが、各々の部落に定まつた宿を持ち一種の尊敬の念を持たれたのは、ゴゼ、大神樂、ポン様の三者であつた点が注意される。

行商人・職人として、薬売り、毒消売り、桶屋、魚屋などがやつて来だが、薬売り、桶屋が昔話を語つたという例が聞かれた。

伝承度

朝日村の金杭という部落を選んで、伝承度の調査をした。まず、昔話を聞いた経験の有無についてであるが、六十歳以上の者の全員四〇歳以上の者の過半数が昔話を聞いた経験を持っており、年齢が高いほど昔話を聞いた経験を持っていると言える。しかし、一〇歳

代の者でも昔話を聞いた経験を持つ者がいる一方、五〇歳代の者でも経験を持たない者がいる。生家に祖父母がいたかどうか（たとえば、分家をしたばかりの家では子供は祖父母と同居しない）など、生活条件も関連していると考えられる。ただし、実際に語れる者はわずかである。

比較的広く知られている話型としては、サルムカンあるいはサルコムカシと呼ばれる「猿聟入」、イスコムカシあるいはチンコムカシと呼ばれる「花咲翁」、「笠地蔵」「時鳥と兄弟」などが挙げられる。また、バカアニヤと呼ばれる一群の愚か聟話（話型としては「沢庵風呂」などが多い）が広く知られている。なお、「時鳥と兄弟」に関しては、語り口に異質な点が見られ、昔話と考えるかどうか検討の必要がある。

形式、場と時

発端句は、「あつたでん」「むかし、あつたてんが」などである。結末句は、「つづき、そらるう」、「つづき、つばぎ、そらるう」、「つづきも、つじじも、そらるう」といった、そらるう系のものがもつとも優勢だが、発端句と比較して多様な変化を示している。さらに、結末句に関して、村上市管沼では「さんづけ、そうろう」、朝日村猿沢では「それで、さんすけ」、三面川の最上流に位置する朝日村三面では「あとは、ないけど」という例が聞かれる。ところ、「さんすけ」という言葉は、聞き手がもう聞きたくないときにも使われ、昔話をせがまれて語り手がもう語りたくないときに語られる形式譚の中にも使われる。

また、相槌は、「エーエー」、「それからどうした」といった例が

多いが、釜杭では「さんすけ」という例が聞かれる。

ところで、佐久間氏の報告によれば、朝日村高根では「さあすけ、さうろう」、「さあすけ」、朝日村北大平では「さあすけ」という結末句が存在している。また、「あとは、ないけど」という結末句が岩船郡山北町に存在することが水沢氏によつて報告されている。以上のように、この地域の結末句は相槌と関連して複雑な様相を示しており、より綿密な調査を必要とする。

語りの場としては、イロリ、コタツ、寝床などが挙げられるが、個々の話者によって異なる傾向がある。たとえば、十八話を語つてくれた朝日村猿沢の高橋オリイさんは、イロリでは聞かず、もっぱら寝床の中で聞いたという。昔話が語られるのは、主に冬の夜や正月であるが、特に正月は、年始の客が多勢来て、そのなかの語り上手から昔話を聞くのが楽しみであったといふ話者が少なくない。釜杭では、三月一日に鎮守である神明宮でバサマノヨゴモリという行事が行なわれる。これは各戸から一人ずつその家の最年長の婦人が孫などを連れて集まり、よもやま話をした後に、田起こし、田植、稻刈りなど、稻作の一連の過程を模倣するのだが、よもやま話をすする際に昔話を語る者もいたといふ。なお、「昼、むかし語ると、鼠が小便ひっかける」という禁忌も広く聞かれる。

伝承経路

順序が逆になるが、まず、家族以外の者から昔話を聞いた例をまとめてみる。

一、猿沢の高橋オリイさんは小学校に入学したころ同じ年頃の女の子がイロリのまわりに集まり、一人ずつ順々に一話ずつ語り合いを

したという。

二、朝日村笹平では、正月に部落の子供を集めて昔話を語つてくれ

る年寄がいたという。

そのほか、部落内の友達の家に遊びに行きそこの祖父母から友達と一緒に昔話を聞くことは広く聞かれる。以上が、先に述べた笹杭のバサマのヨゴモリと合わせて、部落内の者から昔話を聞いた例だが、次に部落外の者から昔話を聞いた例をまとめてみる。

三、笹杭の斎藤リキさんによれば、朝日村岩沢から桶屋が年に二回ほど泊りがけでやつて來たが、仕事が終わって夜になると昔話を語つてくれたという。

四、笹杭の阿部リスさんによれば、婚家に蒲団のつくろいなどの手伝いに年に二回ほど泊りがけで來る女性の年寄がいたが、夜になると昔話を語つたという。この年寄は婚家の遠縁の親類に当たる人だったという。

五、朝日村石住の佐藤サキエさんは隣部落にモリコ（子守り）に行き、その年寄から昔話を聞いたという。

一〇歳から一七歳ぐらいの女の子が他部落に子守り奉公に行くのは戦前まで広く行なわれていたので、このような例は多いと思われるが、モリコの奉公先の範囲は比較的狭く、後述する通婚圏の範囲を越えないと思われる。

六、笹平の山口チケさんによれば、戦前まで四〇歳ぐらいの男の奉公人がおり、娘によく昔話を聞かせたという。ただし、その出身地は記憶していないといふ。

戦前までは裕福な家はモリコの他に男の奉公人を置いていたが、多くの場合、年齢は一七歳から三〇歳ぐらいであり、男の奉公人が昔話を語ることは少なかつたと推測される。なお、この場合も、モ

リコの場合と同様、その奉公先は通婚圏の範囲を越えないと推測される。

七、村上市門前では、毎年薬売りが泊つて行く家があつたが、薬売りが来るとその家の者が近所に使いを出して「遊びに来い」と呼びかけ、人が集まると薬売りが昔話を語つたという。

以上のように、家族以外の者から昔話を聞く機会はかなり多く、昔話の伝承経路としては、家族内の伝承、部落内の伝承、部落外からの伝播の三者が並存していたことが理解される。しかし、三者のうちで、いつれが主たる伝承経路であつたかと言えば、家族内の伝承がもっとも重要な役割を果たしていたと言える。

その伝承経路を話者が記憶していた昔話は八四話だが、その詳細は次のような。

祖母から	四一話
祖父から	一一話
母から	一二話
曾祖父から	一四話
実家の部落の語り手から	一話
婚家の部落の語り手から	二話
姑から	一話
学校の授業で	三話
本で	一話

八四話のうち七七話が生家の家族からの伝承であり、家族内の伝承がもっとも重要な伝承経路であること、また、女性の語り手が重要な役割を演じていたことが理解されよう。

では、なぜ、家族以外の者から昔話を聞く機会が多かつたにもかかわらず、個々の昔話の伝承経路は圧倒的に家系伝承に依るのであ

らうか。

一〇話を語ってくれた朝日村大場沢の羽多野マサノさんは、実家の祖母、婚家の義母、婚家の部落の男の語り手の三者から昔話を聞いた経験を持つが、小さいときに繰り返し聞いたものでないと上手には語れない、と話してくれた。

先に述べた石住の佐藤サキエさんは、実家の祖母、実家の部落の女の語り手、隣部落の奉公先の女性の年寄の三者から昔話を聞いた経験を持つが、祖母から聞いたものを、もっとも良く記憶していると言い、それ以外の昔話は短いものか、断片的なものであった。

幼い時期に毎日のように繰り返し聞くことが昔話を伝承する条件だと考えられるが、すると、年に一回の祭礼に際して聞いた昔話や

年に数回しか訪れない来訪者から聞いた昔話があまり定着しないのは当然と考えられるだろう。すなわち、昔話の伝承においては、家族内の伝承とそれ以外の伝承とでは、おのずと、その比重が異なるのである。

したがって、昔話の伝播においては、通婚による、実家から婚家へという経路が、もっとも重要な役割を果たしていると考えられる。

通 婚 圏

昔話が、実家から婚家へと、通婚によって運搬されたのであれば、当然、通婚圏の範囲が問題となる。

まず、一話でも昔話を語ってくれた話者一人について調査したところ、聾を取った女性の話者三人、家を継いだ男性の話者一人、同一部落の他家に嫁いだ女性の話者五人で、他部落に嫁いだ女性の話者は二人だが、その二人も、隣部落、あるいは隣部落に準じた近

い部落に嫁いでいる。

また、釜杭の通婚圏の調査でも、その通婚圏は村上市と岩船郡の範囲を越えるのは、最近の例が一例あるだけであり、他の部落でも同様であると推測される。

ところで、岩船郡は、「つづき、そうろう」で代表される。そういう系結末句の優勢な地域だが、これは右記の通婚圏の範囲と、ほぼ重なる。調査が不十分なので、断定は避けねばならないが、そういう系結末句の分布を考える上で、何らかの示唆を与えるものであろう。

おわりに

水沢氏、武田正氏などによつて、昔話の伝播におけるゴゼなどの宗教者・芸能者の役割の重要性が強調されているが、むしろ通婚の役割を重視すべきだというのが、本稿の結論である。

本稿をまとめるにあたつては、調査に快く協力して下さった話者の方々をはじめ、筑波大学の直江広治氏、新潟県新発田市の佐久間惇一氏、朝日村教育委員会の斎藤善一氏には大変御世話になつた。特に佐久間氏は未発表の資料をも利用させてくださいました。記して謝意を表する。

参考文献

- 国学院大学民俗文学研究会編『岩船地方昔話集』昭和四〇年
- 佐久間惇一『繪姿女房』昭和四八年
- 佐久間惇一「高根・塩野町地区の口承文芸」（朝日村教育委員会編『朝日村の民俗』昭和五二年）

武田正『民話への招待』昭和四七年

武田正「昔話における『語り』の系譜」(『昔話—研究と資料—』六号)

昭和五二年)

水沢謙一『越後のシンデレラ』昭和三九年

水沢謙一『雪国の夜語り』昭和四三年

水沢謙一『晉女のごめんなんじょ昔』昭和五一年

(おおしま
よしたか)